

令和 3 年 5 月 3 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00418

研究課題名(和文) アイルランド文芸復興の規範、古代修道院文化-水辺の巡礼ネットワークを着眼点に

研究課題名(英文) The Academic City of Monastery as an Ideal Model of the Irish Renaissance:  
Focusing on the Network of Water side

研究代表者

木原 誠 (Kihara, Makoto)

佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00295031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：「暗黒時代」と呼ばれる6-8世紀のアイルランドが各々の修道院を核に発展を遂げた学術都市の集合体であり、ヨーロッパの先鋭的知の発信地だったことが明らかになりつつある。この知見はアイリッシュ・ルネサンス研究の死角、すなわちこの運動はいかなる過去の文化を規範に復権を試みたのかという問いに込めるものである。イエイツはこの修道院文化を規範に据えて復興運動を構想したと推定されるからだ。本研究はこの仮説を作品分析と「免疫の詩学」という独自の方法を用いて検証する。全土をアジールである修道院を漂白する巡礼の学僧により形成された<水辺の巡礼ネットワーク>で結ばれた一つの学術都市・共同体だという観点から検証する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ルネサンス」が「開花」ではなく「復興」の意である以上、「アイリッシュ・ルネサンス」は復興する何かが存在していなければならない。しかも「ルネサンス」が最初に用いられた際に、これがギリシア・ラテン古典文化の復興を意味していたことから、復興する何か、それは優れて知的なイメージを伴うものでなければならない。だがアイルランド文化学研究においては、この抜本的問題がいまだに棚上げされている。本研究は、その解答をメロリング・カロリング朝ルネサンスの原動力となった古代アイルランド修道会の知の文化に求めた。すなわちW. B. イェイツはこの文化を規範にしてアイルランド文芸復興運動を進めていったことを検証した。

研究成果の概要(英文)： It is about to become clear that Ireland in 6th- 8th centuriesAD, called the “Dark Ages,” was a collection of academic cities that developed around each monastery, and was the source of Europe's cutting-edge knowledge. This finding answers the blind spot of Irish Renaissance research, the question of what past culture the movement attempted to restore. It is believed that Yeats envisioned this movement based on this monastic culture. This study tests this hypothesis by using a unique method called “Poetics of Immunity” ; We will examine the whole country from the viewpoint of one academic community connected by “the waterside pilgrimage network” formed by pilgrimage monks wandering the monastery, that is asylum, which is called cultural immunity.

研究分野：アイルランド文学・文化学

キーワード：免疫の詩学 アジール アイリッシュ・ルネサンス 初期修道院文化 水辺の巡礼ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

AD2世紀のヨーロッパにおいては、極西の島・アイルランドは「絶海の孤島」としてではなく、むしろ海路によって四方に開かれた豊かな「自由交易地」として認識されていたであろう。エジプトのプトレマイオスの『ゲオグラフィア』(2C)においては、古代アイルランドは海路によって大陸(外部)に開かれた「15の海岸交易地域」と内部を河川・湖水による水路で結ばれた多くの散所(集落)をもつ開かれた文明の島と捉えられているからである。彼の指摘は歴史資料が乏しいAD6~8世紀の古代アイルランド修道会の成り立ちを考える上で重要なヒントとなる。現在確認されているこの期の修道院跡地はほぼ例外なく海岸線(孤島を含む)・河川流域、湖水地帯に位置しているからである。聖エンダのアラン島の修道院共同体(490年?)、聖フィンアンのクロンナード修道院(530年)、聖コロンバのデリー修道院(546年)、聖キアランのクロンマックノイズ修道院(545~9年)、聖ブレンダンのクロンフォート修道院(554年)、聖コルマンのテリーグラス修道院(6C)、聖スイネルのエルン湖上のクリニッシュ修道院(556年)、聖コムガルと聖フィンアンのペルファストの海岸線のバンゴール修道院とモヴィル修道院(共に558年頃)、聖ケヴィンのウィクロー湖水地帯のグレンダロッホ修道院(6C中期?)、聖ブリジットのキルデア修道院(6C)等々、いずれもそうである。しかもこの修道院文化圏はアイルランド内に留まらない。海路を通じてスコットランドに聖コロンバがアイオナ修道院(6C)、大陸では聖コロンバーヌスがアンヌグレー、ルクセール、フォンテーヌボピオ修道院(6-7C)を創設し、西ローマ帝国の滅亡の後、文化的荒廃が著しい大陸ヨーロッパの知の復権、大陸初の文芸復興=メロリング・カロリング朝ルネサンスに大きく貢献した。これによりアイルランド修道会の名声は大陸全土に知られ、先進の学問を学ぼうとする多くの若者たちが大陸から渡来し、アイルランドは国際学術都市・共同体の様相を呈することになったと推測される(ベータ『英国教会史』にも、その時代の様子が一部記されている)。

これらの修道院は歴史・考古学者E.ベルスナツハが指摘しているように、単なる布教の場ではなく、修道院の周辺に高度な技能を有する職人が住む商業地をもつ「都市」の形態を有しており、さらに各修道院は独自の教育制度により十八歳以上の学僧にギリシア語、ラテン語、釈義学、修辭学を講じ、なかには幾何学までも講じる修道院もあったという。つまり古代アイルランドは各都市が学僧=知の職人たちが集う共同体(ギルド)としてのユニベルシタス(大学)、<学術都市>であったとみることができる。ベルスナツハによれば、これらを「都市」と呼ばないのはギリシア・ラテン的尺度によって都市を定義するからだという。同様にこれらの修道院を「大学」と呼ばないのはギリシア・ラテン的知のパラダイムによって大学を定義するからであるといっ

てよいだろう。むしろ、このような共時的アプローチによる検証の前には、アイルランドにキリスト教がいつどのような形で伝播され、それがどのような経緯で発展を遂げたのかという通時的問題を解明しておかなければならない。この点については最近の多くの歴史・考古学者によって支持されている以下の学説に立脚して研究を進めることができる。聖パトリックが渡来したとされるAD432年(この説は歴史的根拠が希薄)のはるか以前(少なくとも2C)からアイルランドはエジプトとの交易を通じて(先のプトレマイオスの記述に注目)キリスト教がすでに広く知られており、しかもこれらの交易商人や外国人奴隷のなかには多くのキリスト教徒がいたという学説である。この見地に立つならば、ローマ教会とは形態を異にするアイルランド独自のキリスト教の成り立ちも理解されることになるだろう。さらに6Cに突如開花をみた修道院、その「奇蹟」も歴史的に説明可能となるだろう。この知見の妥当性は通説が拠り所とするプロスペルの『年代記』からも確認できる。「助祭パラディウスを、キリスト教を信じるアイルランド人のために派遣した。」(\*この書物にはパラディウスがエジプトで当時絶大な支持を受け、アウグスティヌスによって異端とされた禁欲の神秘主義者・ペレギウス派をカトリックに改宗させるために派遣されたと記されている。このことは、431~2年当時のアイルランドがすでにエジプトとの文化交流によりペレギウス神学などを取り入れながら独自の発展を遂げたキリスト教文化圏のなかであったことを示唆している)。

## 2. 研究の目的

(1)以上述べた学術的背景から、本研究においては一つの命題を措定することにした。すなわち陸路の交流によって発展を遂げた大陸の中央集権的商業都市に対し、古代アイルランドは海路・水路という<水辺のネットワーク>によって発展を遂げた周縁的学術都市・共同体とみる命題である。このことを念頭におけば、個別的に発掘・調査・研究が進められてきた各修道院のエリア・スタディーズの盲点、すなわち6世紀中頃を境にアイルランド全土に同時発生的に水辺に突如出現した修道院の群れ、その誕生の謎(ダグラス・ハイドはこれを「歴史の奇蹟」と呼んでいる)を一つの文化現象として総合的に捉え、各々の発生を相互に関係づける原理を見出せると考えられる。本研究の目的は、まずはこの命題を歴史的に検証することである。

(2)その上で、本研究における次なる目的は、この6世紀半の修道院文化がW. B. イェイツが牽引したアイルランド文芸復興、その規範となったことを検証することである。このことを通して、従来のアイリッシュ・ルネサンス研究の最大の死角を突く問いに対する一つの応えが得られ

ると考えたからである。ルネサンスが文明開化ではなく復興、復権の意である以上、アイリッシュ・ルネサンスは復権する何かは過去に存在していなければならないはずである。だが、この問題がまだ棚上げにされているのが実情である。しかもルネサンスが最初に用いられた際、これがギリシア・ラテンの古典文化の復権を意味していたことから、復権する文化は優れて知的なものでなければならない。それは何かという問いに対する応え、それが6世紀半修道院文化にあると考えたのである。

以上述べた観点に立脚して、改めて W. B. イェイツの生涯に亘る壮大なプロジェクト、アイリッシュ・ルネサンス構想を捉え直してみると、彼のもつ先見性に驚愕を禁じ得ない。彼は R. アーディル著『聖パトリック AD180年渡来説』、R. S. ニコルソン著『聖パトリック 紀元3世紀のアイランド使徒』ほかわずかな文献資料を手がかりに、すでに6世紀半、<水辺>に開花したこの古代・中世アイランド修道院文化の存在を突き止め、その精神と知の伝統を、自身の作品全体及びアイリッシュ・ルネサンス運動の基軸に据えて展開を試みていたと推測されるからである。彼が *A Vision* の中で「ヨーロッパで唯一存在の統合が果たされた偉大な時代」とみる「(6世紀半)のユスティヌス帝のビザンティン帝国(ヨーロッパの極東)の時代」は、ヨーロッパの極西の地、アイランド文化の最盛期に当たり、従ってビザンティウムは6世紀半のアイランドの「仮面」であることがその一つの根拠である。「アイランド人が『ケルズの書』を装飾し、ナショナル・ミュージアムに保管されてある宝石を散りばめた杖を作っていた頃、ビザンティウムはヨーロッパ文明の中心であり、宗教哲学の中心であった。かくして私は霊的探究をこの街への旅として象徴させた」(イェイツ「BBC 放送の講義」)。彼のこの見解は「我が作品の総括的序文 II: 主題」に記されており、それを要約すれば以下ようになる点も看過できない。1) 聖パトリックは432年ではなくAD180年頃に渡来したドルイド・キリスト教徒である。2) 聖パトリックの『告白』の信条こそ古代アイランド修道士に通底する信条であり「私が生涯信じる信条」である。3) 「極西教会」は各地域と密接に結びついた各々独立した制度・風習を有し、このため「復活祭論争」において併合を目論むローマ教会と激しく対立した。4) 極西教会はその独自性のゆえにヨーロッパ史において固有の位置を占めたが、ローマ教会による幾多の公会議、弾圧によって消滅した。5) だが文学においてはこの伝統は未だ消滅していない。以上の記述はイェイツの全作品の読み直し、及びアイランド文芸復興運動の相貌を源流にまで辿って位置づけ直す作業の必要性を示唆している。以上の命題を検証していくことが本研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

1) 本研究は「免疫の詩学」という独自に考案した方法によって検証を試みた。その方法の概略はおよそ以下のものである。本研究の着想の淵源は文化共同体を身体に見立て、それが免疫システムに並行しているという考え方に基<sup>ホドク</sup>づいている。学術都市共同体を無縁所=アジールとみることで、このような詩学的な観点に基づく発想もこの方法の一環である。それは免疫作用の根本原理である逆説の生命原理、網野善彦がいう「無縁/アジールの原理」、つまり文化における「コミュニティ(原義は「役を共有するもの」)」「縁」をその逆説としての「インコミュニティ(原義は「役/疫を免れたもの」)」「無縁」である<免疫作用/無縁の原理>によって切り結ぶ身体の根本原理、そこに着想を得たものである。生物学的には自己のアイデンティティは脳にも心臓にもなく、免疫に宿っている。免疫は自己と非自己を識別し、非自己を異物として自己性を保つのであるが、免疫は脳にないため、拒絶されるのはむしろ脳の方だからである。つまり身体全体の記憶を宿す(記憶を宿す場所に自己の主体=アイデンティティは宿る)器官、それは脳のなかにも心臓のなかにも存在せず、身体の漂白者である<ディアスポラ細胞>、免疫のなかにもみ宿っていることになる。同様に、文化の主体は社会の中心(中央都市)にではなく、むしろその周縁にある放浪者たちが肩を寄せ合う露の宿り場であるアジール、ここにこそ宿っている。この命題に「免疫の詩学」は基礎を置いた。本研究が「アジール」あるいは<アジール=知のギルド(ウニベルシタス)>としての六世紀半の修道院文化、そこに大いに注目する所以がここにあった。すなわち当時の各修道院は水辺のネットワークのなかで働く共同体における「免疫」に相当するものであるとみたわけである。

2) 「免疫の詩学」の方法は、いまだ歴史の闇に包まれたままの水辺のネットワーク、その相貌を考察していく場合にも有効である。それはこういうことである。免疫システムの作用は可視化されないが、一度、身体内にウィルスが侵入すれば、免疫活動は活発化し、その侵入の痕跡を印として残す。こうして病患のあとに残る腫れ物=しるしを分析することをとおして、システム全体の働きを検証することが可能となるのである。そこで重要な意味をもってするのが、八世紀の終わりから九世紀初頭にかけて、修道院文化共同体内部に深く侵入し、その共同体に決定的打撃を与えたヴァイキング(ノルウェイ・ヴァイキング)が残した軌跡である。つまりこのヴァイキングの学術共同体内部への侵入経路を辿っていく行程をとおして、逆説的に水辺のネットワーク全体の仕組みが解明できるというわけである。

### 4. 研究成果

1) アイリッシュ・ルネサンス研究の死角はイェイツ研究の死角と重なる(私見ではこの死角の存在を暗示的にせよ指摘した先行研究は、P. マーキュリーの『アイリッシュ・ルネサンス』とキャサリン・レインの『秘儀参入者 イェイツ』だけである)。もちろん復興を牽引したのが

イエイツであるから、二つの死角の一致は必然的である。従って二つの研究は相互補完的なものとして考察を進める必要があった。かくして本研究における解明すべき問題は以下の二つに絞られることになった。

1) イエイツが6世紀半～8世紀前半のアイランドを知の共同体としてのギルドの集合体として捉え、そのイメージが彼の作品世界の基軸をなしているという仮説の検証。

2) 彼が先導したアイリッシュ・ルネサンス運動、その復興・復権の規範に彼が据えたものが修道院文化であったという仮説の検証。さらにその知見がどの程度、他の復興に参加した作家と共有され、それが運動自体にどの程度反映されていたのかについての具体的な検証、以上である。

1)の解明にあたっての着眼点はアイランド固有の巡礼のあり方、自らを漂白の無縁者＝「緑の殉教者」とみなし、修道院をアジール(無縁所としての免役/疫)として定住を拒み、生涯に亘って「贖罪巡礼」の旅を続ける特殊な巡礼のあり方に求めた。このあり方はイエイツの作品全体の核心をなすイメージともなっていると考えたからである。もちろん、かかる巡礼の遍路は6～8世紀に全盛期をむかえた修道院文化、それを成り立たせる<水辺のネットワーク>による巡礼の遍路と重なるものである。イエイツは最初にアイランド独自の「贖罪巡礼」に気づき、これを自身の作品世界の核心的イメージである「アイランドの魂の歴史」を体現する「古代修道僧＝カルディ」＝「巡礼の魂」を作品に取り込んでいくプロセスの中で、<水辺のネットワーク>を通じて6世紀に発生した修道院文化を発見し、これを自身の作品世界、及び自身が先導したアイリッシュ・ルネサンスの規範に据えようとした。実際、イエイツの間テキストに表れる各修道院を聖地(ステーション)とする巡礼の遍路は本研究で調査した結果、いずれも水辺の巡礼ネットワークと重なっていることが確認された。この考察の際に念頭においた観点は、アイランド北西部を中心とする水辺の巡礼ネットワークによって結ばれた聖パトリックの贖罪巡礼のあり方とアーサー教会とダウン・パトリックを中心とする北東部にみられる水辺のネットワークに属さない中央集権的な聖パトリックの聖地巡礼のあり方、その差異をイメージの対立として彼が作品世界の中で描いているという観点であった。この観点を実証的に検証していくためにはさらなるテキスト分析と同時に、現地での調査が不可欠となった。調査対象として想定し、現地調査を行った地域は、北西部においてはアイリッシュ・ルネサンスの象徴的意味を担うアラン島(聖エンダのアラン島修道院 \*イエイツはアラン島を舞台に小説を書こうしたが、それを断念しその構想をシングに託した)、イエイツの『アシーンの放浪』と『ベン・ブルベンの麓で』の背景にあるクロ・パトリック山(聖パトリックの贖罪巡礼の聖地 \*クレア州)からベン・ブルベン山(聖コロンバのドラムクリフ修道院 \*スライゴ州)を経てダーク湖の小島にあるステーション・アイランド(聖パトリックの煉獄巡礼の聖地 \*ドニゴール州)に至る<贖罪巡礼の遍路>、さらにクロンマックノイズ修道会周辺である。北東部に関しては、アーサー教会(聖パトリック教会の総本山)とダウン・パトリック(聖パトリックの永眠する聖地)とベルファストの海岸線にあるモヴィル修道会、バンゴール修道会、聖ブリジッドのギルデア修道会である。

2)については、先の「総括的序文」の中で彼と知見を共有したと記されているアイリッシュ・ルネサンスの作家、シング、グレゴリー夫人に絞って検証を試みた。結論は、シングとグレゴリー夫人は水辺の修道院文化についての理解をかなりの程度共有していたというものである。シングが描くアラン島もグレゴリー夫人の邸宅があるクール・パークも、水辺の巡礼ネットワークによって結ばれた修道院文化圏の只中にあるのだが、テキスト分析により彼らが作品の中でこのことを意識し、反映させていることを確認することができた。

1)と2)を通じて最終的な成果は、大陸のルネサンスとベクトルを逆にもつアイリッシュ・ルネサンス独自の相貌である。前者は暗黒の中世から光を求めてギリシア・ラテン古典文化を復興させようとした。これに対し後者はこの古典文化(特にラテン文化)によって排除・圧殺・暗黒化された<光の中世>を求めて古代アイランドを復興させたのである。イタリア・ルネサンスの逆説としてのアイリッシュ・ルネサンスというわけである。

2)以下、2018年度から2020年度までの成果報告を年次ごとに記す。

2018年度は、8月の一ヶ月間をかけてアイランド修道院の跡地を現地調査した。聖ブリジッドゆかりのキルデア修道院、聖ケヴィンのグレンダロップ修道院、ケリー州の聖ブレンダンゆかりの各修道院など。いずれも水辺、すなわち海岸・河川・湖畔を一つに<切り結ぶ>巡礼のネットワークの存在が確認された。同時に、このネットワークの存在により、ヴァイキングの標的にされたことも確認された。ヴァイキングたちはこのネットワークに熟知し、これを逆利用して、アイランドに來襲したからである。彼らがアイランドに建設した中世都市、ダブリン(黒い川の意)、ウェックスフォード、ウォーターフォードの名前に北欧言語の名残を留めていることから、このことは確認できた(フォードはフィヨルドに由来する)。

2019年度は、8月にアイランド北部のゴールウェイ州の修道院の跡地、アラン島(イニシマン島とイニシマーン島)を現地調査した。いずれも水辺、すなわち海岸・河川・湖畔を一つに<切り結ぶ>巡礼のネットワークの存在が確認された。同時に、これらの地(アイランド極西地)は地中海に直結する大西洋岸に面しており、そこから<大西洋文化圏の中のアイランド>という独自の文化・文学的伝統を有しているのではないか、という新たな命題とその展望が開かれることになった。この命題の底流には、「ケルト文化 ドナウ河上流起源説」の定説を覆す、J.コッホやカンリフらが提唱する「ケルト文化 大西洋起源・固有説」にも通じるアイランド独自の<極西の思考>が潜んでいると考えられる。

2020年度は、8世紀末の初期ヴァイキングによるスコットランド・アイルランドの侵入経路を、これまで収集した文献・資料を手がかりに分析を試みた(コロナ禍においてフィールド・ワークは断念せざるを得なかった)。結果、初期ヴァイキングはいずれもアイルランド系(聖コロンバ系)修道院をターゲットに絞った上で侵略を試みており、それは聖書の装飾写本を掠奪する目的であったことが確認できた。793年に始まるスコットランドの修道会、すなわちリンデスファーン修道院、795年のアイオナ、スカイ島、マン島の修道院の侵入、795年に始まるアイルランド修道院、すなわちアイルランド北東部のラスリン島(795年)、ダブリン沿岸のランベイ島(795年)、北西部のスライゴーの沿岸に浮かぶイニスムーレイ島(795年)、ゴールウェイの沿岸に位置するイニスヴォーフィン島(795年)、いずれも聖コロンバの影響下にある修道院である。これにより、逆説的に水辺の修道院のネットワークの外輪を辿ることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 木原誠	4. 巻 第4集
2. 論文標題 アイルランド文芸復興の規範、古代修道院文化（科研・研究報告1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部論文集	6. 最初と最後の頁 29-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木原誠	4. 巻 第3集第1号
2. 論文標題 W. B. イェイツのリアリティ/ファンタスマゴリア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部論文集	6. 最初と最後の頁 17-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木原誠	4. 巻 第5集
2. 論文標題 アイルランド 水辺の思考（科研費・研究報告II）-大西洋文化圏・文学の発生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部論文集	6. 最初と最後の頁 19-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木原誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 574頁
3. 書名 イェイツ・コードー詩魂の源流/面影の技法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------